「修飾」について
A COGNI—INFORMATIONAL APPROACH[1]

山　内　信　幸

I

「修飾」という現象は，あらゆる言語において観察されうる普遍的なものであるが，それに対する十全な分析はまだ行なわれていないのが現状と言えよう。例えば，「修飾」及び「修飾語」という項目について二，三の専門の辞書の定義を参照してみると，

＜修飾＞

すでに固有の意味をもつ語・句・節・文に付加して，その意味を何らかの点で限定すること。[2]

＜修飾語＞

すでに独立した意味をもつ文・節・句・語に付加されて，その意味に何らかの限定・記述を加える機能をもつ語または語群をいう。[3]

に見られるように，一見すると妥当な定義のように思われるが，修飾語になりうる形式としての形容詞・副詞などは実に多様な意味・機能を有していて，[4] 簡単に問題が処理されるようには到底思われない。

そこで，当該の問題点を最も如実に示している例として，(1)を見てみることにしよう。

(1) a. He was now smoking a *sad* cigarette.
　　b. I balanced a *thoughtful* lump of sugar on the teaspoon.

c. It was the hottest day of the summer, and though somebody opened a *tentative* window or two, the atmosphere remained distinctive and individual.

d. He has never earned an *honest* dollar.[5]

上記例文中の斜体字の語は，本来属すべき範疇である形容詞という機能から離れて，形式上は，他の語の修飾語として用いられている「転移修飾語(transferred epithet)」と呼ばれているものである。ここで問題となるのは，(1)形式と意味の関係，すなわち，形式上修飾している名詞から離れて，意味上は，ある行為を行なっている行為者（明示された主語や一般の人々）の状態や態度，話者の判断や感情そして行為自体の様態などを修飾している[6]という事実をどのように捉えるのか，また，(2)「～を修飾する」や「～にかかる」という概念をどのように一般化するのかの二点に集約できるように思われる。

本稿の目的は，「修飾」という概念の根底に潜むと思われる重大な問題に関して，従来の伝統文法や構造主義文法で試みられたアプローチの不備を指摘し，より望ましいアプローチを生成文法（X-bar 理論）に求め，かつ，その上で X-bar 理論に基づくアプローチの限界と今後の可能性を示唆することにある。

II

この節では，伝統文法（特に Jespersen）とアメリカ構造主義言語学（特に Bloomfield）における「形容詞＋名詞」構造の分析に焦点を当て，その不備を簡単に指摘することにする。

Jespersen (1913) は，*A Modern English Grammar on Historical Principles, Part II* において，「形容詞＋名詞」構造を次のように分類する。

(2) direct relation
indirect relation
- shifted subjunct-adjunct
- partial adjunct
- compositional adjunct
- others [7]

すなわち，限定形容詞である付加詞とその主要語の関係は，通常，直接的関係 (a young lady=a lady who is young) と間接的関係に分かれ，さらに後者は，転移従接詞的付加詞 (a hard worker=a man who works hard)，部分付加詞 (a regional novelist=a [regional novel]+[ist])，複合付加詞 (a sick room=a room for the sick) などに細分される。Jespersen の卓見は今更改めて述べるまでもないが，これらはあくまで分類・整理されただけで，付加詞と主要語の関係についての説明はされていないと言えよう。更に，例えば，関係詞を含む節へパラフレーズする場合においても，様々な問題点が露呈する。

(3) a. a rural policeman
b. *a policeman who is rural

(4) a. an utter fool
b. *a fool who is utter

(5) a. a provincial governor
b. ≠a governor who is provincial[8]

(3)〜(4)に見られるように，当該の名詞句が必ずしも関係代名詞化できなかったり，(5)に見られるように，当該の名詞句が「地方の長官」と「田舎くさい長官」の2通りの意味を表わすのに対し，関係代名詞化された (5b) は「田舎くさい長官」の意味しか表わさないといった事実からも，統一的な説明はかなり困難なように思われるが，Jespersen はそれについて何の分析も試みていない。

次に，アメリカ構造主義言語学における「形容詞＋名詞」構造の分析に目

を移してみよう。句として成立する条件を直接構成素分析に基づいて明確な形で提示したのは Bloomfield (1933) であると言ってよかろう。彼は句構造を「外心構造 (exocentric construction)」と「内心構造 (endocentric construction)」に分け,「形容詞+名詞」構造を後者の構造と見做した。例えば,

(6) poor John

という句においては, poor はその構成素である John と共に同じ形態類に属し, 文中においても同じ機能を持つと見る。[9] 確かに, この基準は, どのような観点からも明らかに「連体詞 (attribute)」と「主要語 (head)」と認定できるものに関しては有力な分析であると思われるが, 句というものをもっと広範囲に扱おうとすると, 即ち, 理由・手段・様態・時・場所などを示す副詞句や話者の心的態度や判断を示す文修飾の副詞句等の処理に関しては,「句の統語論的形式類は語類から導くことができる」[10]と強く主張するあまり, すぐにその不備が露呈してしまう。

以上のように, 従来のアプローチに共通した欠点というのは, 形式的(=形態的)基準に依存しすぎるために, 言語事実を見逃してしまい, また,「どこにかかる」ということに拘泥するあまり, 形容詞・副詞(→名詞・動詞)という範疇によって自縄自縛の状態に陥っていると言えよう。次節では, 生成文法の枠組みにおいて「範疇」や「修飾語」といった概念がどのように取り扱われているかを概観することにする。

III

生成文法の枠組みにおいて規定されている「範疇」というものは, 一見すると, 伝統文法における「品詞 (parts of speech)」あるいは構造主義言語学における「類 (class)」に相当しているように思われる。しかし, 例えば, N という範疇は, 概念的定義や形態的基準によって定められるのではなく, 概ね, 枝分かれ図の N を開いた時に得られる成員の集合体であり, リストの

形で示される。言い換えれば，変形規則において言及されるかどうか，正しい意味解釈や音声解釈が与えられるように設定されているかどうかなどのように，文法体系の中で果たす役割によって相対的に定義されている。

生成文法の理論的変遷を通じて，変形の記述力が出来うるかぎり厳しく制限されてきたため，変形が節点標示，即ち，範疇を新たに作り出したり，変更したりすることを認めていないので，表層に現れている範疇はすべて深層においても表示されなければならない。となると，基底部がかなり複雑になることが予想されるが，こういった諸々の問題を一手に引き受け，異なる範疇間に見られる統語的な平行性を出来る限り一般的で，シンプルな形で捉えようと案出されたのが X-bar 理論である。

この理論では，(7)で示されるように，範疇は少数の限られた素性の複合体と規定され，四つの語彙範疇が定義される。

(7) N: $\begin{bmatrix}+N\\-V\end{bmatrix}$ V: $\begin{bmatrix}-N\\+V\end{bmatrix}$

A: $\begin{bmatrix}+N\\+V\end{bmatrix}$ P: $\begin{bmatrix}-N\\-V\end{bmatrix}$[11]

また，句構造規則，特にＮＰ，ＶＰ，ＡＰ等を展開する規則は必ず次のような一定の式型に従わなければならないとされている。

(8) i. $S \rightarrow \overline{\overline{N}}\,\overline{\overline{V}}$

ii. $\overline{\overline{X}} \rightarrow [\mathrm{Spec}, \overline{X}]\ \overline{X}$

iii. $\overline{X} \rightarrow X \ldots$ [12]

ここで X は N, A, V を表わす変項で，$\overline{X}$ は X を主要部として含む句で，$\overline{\overline{X}}$ は $\overline{X}$ を直接支配する句で，従来の NP, AP などに相当する。[Spec, $\overline{X}$] は $\overline{X}$ と結び付いた修飾要素を表わし，具体的には，[Spec, $\overline{N}$] は限定詞 (Det), [Spec, $\overline{V}$] は助動詞 (Aux), [Spec, $\overline{A}$] は程度の副詞（句）を表わすとされる。さらに，X ... においては，X の補助部 (Complement) を表わ

し，具体的には，(9)のようになる。

(9) i. $\overline{N} \rightarrow N$ Comp
ii. $\overline{V} \rightarrow V$ Comp
iii. $\overline{A} \rightarrow A$ Comp
iv. Comp→NP, PP, S, NP S, NP PP, PP PP etc.

いま一度，修飾語というものに話を限定して考えてみると，新しく設定された「修飾語」という範疇は，X-bar 理論では，「指定辞 (Specifier)」と「補部 (Complement)」と呼ばれている。つまり，N, V, A などを含む上位範疇を開いた時に得られる主要語の左側に生じるものが指定辞，右側に生じるものが補部とされる。

この理論によれば，N, V, A に付く要素はすべて，具体的には，冠詞，主語，目的語，助動詞，時制，種々の補文，文修飾の副詞（句），時や場所などを表わす副詞（句）が，「修飾語」になりえるわけで，従来の伝統的な「修飾語」という概念は，主要語の左側に生ずるか，あるいは，右側に生ずるかという，極めて整理された統語的構造として説明されうるようになった。

以上のように見てくると，X-bar 理論によって，修飾という現象が極めてシンプルな形で説明されうるようになったと思われるが，これはあくまで統語的な側面においてのみであることを忘れてはならない。意味的・機能的な面から見ると，当然，指定辞や補部と主要語との関係は一様ではないため，統語的側面とは別の観点からの考察が必要になってくる。次節では，「修飾」という現象を機能論的・情報論的な面から考察してみる。

IV

修飾語の持つ特性というものは，統語的にはあってもなくてもよい随意的要素で，主要語に対して従位的な要素であると言うことができよう。しかし，このことを機能論的・情報論的見地から眺めると，事態は一変するように思われる。本節では，「修飾」という現象を情報構造という観点から眺め，従

来の「旧情報」v.s.「新情報」という dichotomy だけでは不十分で，プロトタイプ論的に「旧情報」から「新情報」への連続体の中で相対的に捉えることを提案する。

言語において修飾語の機能を考察する場合，修飾語を単にその主要語との関係において見るだけでなく，談話全体の流れ，すなわち，発話の情報構造という観点から眺める必要がある。以下，具体的な例を，まず，副詞から見てみることにしよう。

(10) a. His house stands *on a hill*.
b. He left his umbrella *on the train*.

(10) における斜体字の副詞句は，それぞれ動詞に対する修飾要素と見做されている。しかも，統語的にはあってもなくてもよい随意的な要素とされていながらも，(10a, b) においては省略することはできない。同様のことが，(11) の例における副詞においても言えよう。

(11) a. The mother treated her daughter *badly*.
b. John worded the letter *carefully*.

さらに，名詞の前位修飾要素としての副詞についても，興味深い事実が観察される。

(12) a. a *newly* discovered vitamin
b. *a discovered vitamin

(13) a. the *maliciously* killed man
b. *the killed man

それぞれ (12b) (13b) のように斜体字の副詞が欠如している表現は非文法的である。

以上のことからも明らかなように，それぞれの斜体字の副詞（句）の部分は，情報構造的には必要不可欠なものであるが故に省略不可能であり，[13] 決

して「飾り」的な要素ではないことは明らかであろう。

次に修飾要素として主要な役割を果たしている形容詞の機能を調べてみることにしよう。

形容詞も統語的には主要語に対する従位的要素と見做されているが，情報構造的には果たしてそうであろうか。ある要素（ここでは形容詞）が談話の流れの中で情報的にフォーカスが置かれた要素であるか否かをテストする方法がいくつかある。例えば，

(14) They were *honest* people.

の例文に対して，(1)否定文，(2)疑問文，(3)「うそテスト」を用いて調べてみることにしよう。[14]

(15) They were not honest people.

(16) Were they honest people?

(17) Mary said, "They were honest people, which is a lie—they were not."

(15) は (14) に否定詞の not を付加しただけであるが，「彼らが人々であった」ことは既定の事実でそれを否定することはできないのであり，否定の作用域には "honest" が入っていると言えよう。また，(16) においても，尋ねているのは「彼らが人々であった」かどうかではなく「正直な」のかどうかであることは自明であろう。さらに，(17) では，「メアリーは ... と言ったが，それはうそで，実際はそうではない」という談話の中で，話題として受け継がれていく部分は，明らかに，"honest" の部分と言えよう。

また，補部を形成している，いわゆる，叙述用法と呼ばれるものについても，その一例として (18) のように，形容詞 "tired" が，情報構造上，「新情報」ということになる。

(18) a. How do they look?
b. They look tired.

このように見てくると，形容詞・副詞などの修飾語（X-bar 流に言うと指定辞及び補部）は，情報構造上，随意的要素では決してなく，主要な役割，すなわち,「新情報」の役割を果たしていると言うことができよう。つまり，統語構造的には，枝分かれ図を開いた時に，主要語の前・後位によって，それぞれ，指定辞と補部に分かれ，情報構造的には，修飾語はすべて「新情報」と言うことで処理できれば，かなり整理された一般化ができることになるであろう。

ただ，ここで一つ問題となることが生じてくる。確かに，補部の一種である副詞の場合は，主要語 (V) の右側に生じるために問題はないが,[15] 形容詞は，指定辞として現れる場合，通常，主要語 (N) の左側に生じて，なおかつ,「新情報」であるという本稿の論旨と，拙稿 (1988)[16] における主張とは矛盾していることになってしまう。

拙稿 (1988) では，主要語 (N) を取り巻く形容詞の生起位置という統語的側面が，情報構造的に密接に関連していて，Svoboda (1968)[17] の指摘を待つまでもなく，主要語の前位が "unmarked" な位置で，後位が "marked" な位置，すなわち，前位が「旧情報」，後位が「新情報」であるという主張を行った。一見すると，本稿の議論と矛盾しているように思われるが，これは，あくまで，統語構造が反映した情報構造に基づいた分析であることに留意しなければならない。言い換えれば，統語レベルに基づく情報値というものは，従来の「旧 v.s. 新」という二項対立的概念で処理され，情報値の高低は，文頭より文末という "end-weight" の原則に基づいて決定されていると言える。故に，統語構造に基づいた情報値として，前位を「旧情報」と捉えるのは，後位を「新情報」とするための，言わば，必然の前提と言わざるをえない。

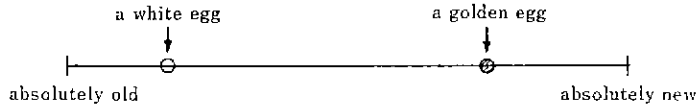
そこで，次の (19) の例を見てみることにしよう。

(19) a. a *white* egg
b. a *golden* egg

どちらの指定辞の部分も，統語レベルに基づいた情報値としては，「旧情報」とみなせるが，両者には，直観的な相違があるように思われる。つまり，卵を記述・説明している際に，「白い」という属性はかなり予測可能なものであり，その意味で，情報量の少ないもの（＝〝旧〟情報）と言えるが，「黄金色の」という属性は，少なくとも「白い」という属性よりは，情報量が〝より〟多いと言える。

人間の認知作用は，コンピューターのようにすべて二項対立で処理できるものではなく，例えば，情報値一つを取ってみても，「旧情報」から「新情報」への連続体であることが予想される。(19) の場合も，(20) で示すように，

(20)



「絶対的旧情報」という観点からすると，"white" も "golden" も少なくとも「新情報」に属し，[18]「旧情報」から「新情報」という continuum 上では，両者は異なった地点に位置していると考えれば，うまく説明できるのではないだろうか。[19] つまり，指定辞の有する統語レベルに基づいた情報値は，あくまで統語構造が反映されたものとして，一律に，「旧情報」と捉え，認知レベルに基づいた情報値は，"absolutely old" ではないという点で，「新情報」であるとしながらも，両者間には，何らかの情報値の差異を設定するのである。以上のような考え方を，仮に，"cogni-informational approach" と呼ぶことにする。

この様に，従来のような統語構造が反映した情報構造という見方だけではなく，より高次の認知作用というレベルまで分析を広げ，さらに，二項対立

的な概念によってではなく，プロトタイプ論的概念に基づいた情報構造を設定するという "cogni-informational approach" によって，幾つかの現象を説明することができよう。その一例として，本稿の最初で提示した (1) の各例をもう一度検討してみよう。これらは，意味的には，副詞を含む文にそれぞれパラフレーズできる。

(21) a. He was now smoking a *sad* cigarette.
b. He was now *sadly* smoking a cigarette.

(22) a. I balanced a *thoughtful* lump of sugar on the teaspoon.
b. I *thoughtfully* balanced a lump of sugar on the teaspoon.

(23) a. It was the hottest day of the summer, and though somebody opened a *tentative* window or two, the atmosphere remained distinctive and individual.
b. It was the hottest day of the summer, and though somebody opened a window or two *tentatively*, the atmosphere remained distinctive and individual.

(24) a. He has never earned an *honest* dollar.
b. He has never earned a dollar *honestly*.

この (21)〜(24) の各例には，興味深い事実が隠されていて，Hall (1973) が指摘しているように，"transferred epithet" と呼ばれる形容詞を含む名詞句は，通例，不定冠詞としか共起できない。[20] この事実は，修飾語が統語的には旧情報の位置と考えられている主要語の前位に位置しながらも，その働きは，上述のパラフレーズででも明らかなように，「補部＝副詞」としての機能を有するため，認知のレベルでは，あくまで，新情報の continuum 上にあり，それ故に，旧情報を示すとされている定冠詞とは共起できないと考えることで，うまく説明がつくように思われる。

V

「修飾」という現象を統一的に扱うのはかなり難しいが，生成文法に基づく X-bar 理論によるアプローチは，形式面から見た場合，従来のどのアプローチよりも包括的であるように思われる。すなわち，N, V, A などの上位範疇を開いた時の主要語の左側に生じるものを「指定辞」として，そして，右側に生じるものを「補部」として，修飾語全般を捉えようとするため，かなり射程の広い理論と言えよう。

しかしながら，「修飾」という現象を情報構造的に見た場合，修飾語というものは，単に随意的な「飾り」的要素ではなく，かなり重要な役割，すなわち，新情報としての役割を担っている。ただ，統語構造に基づいた情報値は，従来，「旧情報」v.s.「新情報」という二項対立的概念で捉えられていて，形式的には，「指定辞」が「旧情報」として，「補部」が「新情報」として処理されていた。これは，一方では，統語構造が反映した情報値であり，他方では，情報値を二項対立的概念で捉えようとしたために生じた誤謬であると言えよう。そこで，認知構造に基づく情報値は，認知作用そのものがあくまで "continuum" であることに鑑み，「旧情報」から「新情報」への連続体の中で決定されるべきものであり，修飾語は，情報構造上，少なくとも「絶対的旧情報」ではないという点で，「新情報」であり，個々によって，その程度差を認める立場を採るべきであると主張した。

以上のように，「修飾」という現象は，統語構造面と情報構造面の両方からのアプローチによって初めてその全容が明らかになり，具体的には，統語構造上は，主要語の前・後位に生じるものということで，情報構造上は，程度差は認めながら，すべて「新情報」ということで処理することによって，修飾語に対して，より精緻な一般化がなされうると言えよう。この結論を踏まえ，本稿では十分な議論が尽くせなかった文法記述における範疇設定の際の種類及び数の問題，情報構造と認知作用の連関（=cogni-informational

approach）の可能性及び情報構造のプロトタイプ論的処理の妥当性を，今後の研究課題として，もっと掘り下げて考えていくことにしたい。

注

※本稿は日本比較文化学会関西支部月例会（1989年4月22日・同志社大学）において，「Some Remarks on Modification」と題して口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。当日，貴重な示唆と助言を賜った諸先生方に感謝の意を表する。

1　本稿を執筆するにあたり，安井稔「修飾ということ」『日本語学』第2巻第10号（1983年）10-7が非常に参考になった。

2　田中春美編『現代言語学辞典』（東京：成美堂，1988年），p. 397.

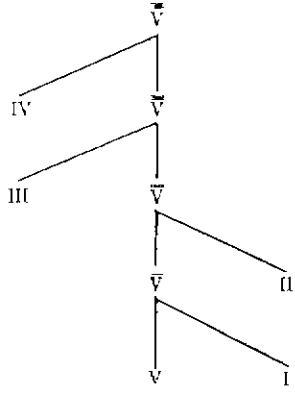
3　大塚高信・中島文雄監修『新英語学辞典』（東京：研究社，1982年），p. 724.

4　例えば，限定用法（前位用法）に用いられる形容詞は次のように分類できる。

(1)　分類的形容詞
(2)　特性記述形容詞
　　a）制限的形容詞
　　b）状態記述形容詞
(3)　同定の形容詞
　　a）完全同定の形容詞
　　b）部分同定の形容詞
(4)　強意の形容詞
　　a）名詞強意の形容詞
　　b）限定詞強意の形容詞

安井稔・秋山怜・中村捷『形容詞』（東京：研究社，1976年），p. 74を参照。

また，副詞の複雑な文法的振舞いに関して，修飾構造の階層性という観点から説明できる。



I: politely, carefully (様態)/there, abroad (場所)/briefly, temporarily (時)
II: now, recently, yesterday, awhile (時)/there, somewhere, elsewhere, abroad (場所)/thoughtfully, badly, perfectly, suddenly, slowly, completely (様態)/always, frequently, constantly, regularly (頻度)
III: certainly, surely, possibly, perhaps, evidently (蓋然性)/wisely, rightly, correctly, cleverly (主語指向)
IV: frankly, truthfully, honestly, strictly (発話の様態)/fortunately, happily, regrettably, surprisingly (評価)

松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編『大修館英語学事典』(東京：大修館, 1983年), pp. 580–1.

5 用例 (1 a～c) は Hall (1973), (1d) は安井稔・秋山怜・中村捷 (1976年) に拠る。Robert A. Hall, Jr., "The Transferred Epithet in P.G. Wodehouse," *Linguistic Inquiry*, 4 (1973), 92 及び安井稔・秋山怜・中村捷, p. 176 を参照。

6 転移修飾語が意味上関係を持つ語は様々であり，概略，次のようになるであろう。

(1) 意味上関係を持つ語が明示されていて，ある行為を行なう主語である場合。
(2) 意味上関係を持つ語が一般の人など不定のものである場合。
(3) 意味上関係を持つ語が話者である場合。
(4) 意味上関係を持つ語が動詞である場合。

安井稔・秋山怜・中村捷, pp. 176–9 を参照。

7 Otto Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part II. Syntax, First Volume* (Heidelberg: Carl Winter, 1913), pp. 283–309.

8 詳しくは，拙稿「英語の形容詞の修飾構造をめぐって—機能論的アプローチ—」『ことばの鏡—木村俊夫先生古希記念論文集—』(東京：英宝社, 1988年), pp. 404–5 を参照。

9 Leonard Bloomfield, *Language* (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1933), p. 194.

10 *Ibid.*, p. 196.

11 Chomsky & Lasnik (1977) では，より簡潔に

	+N	−N
+V	Adjective	Verb
−V	Noun	Preposition

と表記されている。Noam Chomsky & Howard Lasnik, "Filters and Control," *Linguistic Inquiry*, 8 (1977), 430.

12 X-bar 理論におけるこれらの句構造規則に関しては，幾つかの異なる分析が提案されている。すなわち，Sを最大投射とするかどうか，また，SをV投射と見做すかどうかなどに関する提案であるが，本稿では，便宜上，Chomsky (1970) の提案に従う。Noam Chomsky, "Remarks on Nominalization," *Readings in English*

Transformational Grammar," eds. Roderick A. Jacobs & Peter S. Rosenbaum (Walthan, Massachusetts: Gin and Company, 1970), pp. 52–3.

13 このような「省略不可能 (non-omissible)」という概念は，Ivić (1962) によって初めて導入された概念である。いずれにしても，当該の箇所は，その情報量の多さのために，省略不可能であることには変わりはなかろう。詳しくは，M. Ivić, "The Grammatical Category of Non-omissible Determiners," *Lingua*, 11 (1962), 199–204 を参照。

14 安井稔，16–7 を参照。

15 例えば，"*Happily*, Tom didn't die." などのような文頭に生じることのできる文副詞なども，すべて基底部では主要語の右側で生成され，表層構造で左側に移動したと考えることにする。

16 拙稿，pp. 411–2 を参照のこと。

17 A. Svoboda, "The Hierarchy of Communicative Units and Fields as Illustrated by English Attributive Construction," *Brno Studies in English*, 7 (1968), 66 を参照。

18 便宜上，「絶対的旧情報」を最も "unmarked" なものとして論を進めることにする。

19 この考え方は，例えば，「比喩」の分析にも適用可能なように思われる。従来の変形文法では，「選択制限 (selectional restrictions)」の違反という "clearcut" な基準で処理しようとするが，実際は，もっと複雑で微妙な意味的差異が存在し，明確な線引を行うのが困難である場合が多い。それ故に，比喩の分析に対しても，段階性を認める立場を採るほうがより賢明であろう。

20 Robert A. Hall., Jr., 93–4.

Synopsis

On Modification: A Cogni-informational Approach

Nobuyuki Yamauchi

Since the phenomena of "modification" are construed as universal in all human languages, numberless attempts to describe them have been made. According to the author's opinion, however, none of them seem adequate and persuasive, mainly because adjectives and adverbs offer too many complicated problems in their syntax and semantics. The aim of the present paper is to explore some aspects of modification through some assumptions of the cogni-informational approach. There are two points to be pursued in the discussion:

(i) the relationship between form and meaning of modifiers (*e.g.* seen in "transferred epithets")
(ii) the generalization of the notion of "modification."

In relation to these, a short criticism on the previous approaches such as traditional grammar (*e.g.* by Jespersen) and structural linguistics (*e.g.* by Bloomfield) is introduced. It may reveal that they both fail to capture every minute aspect of modifiers because they depend too much on formal (=morphological) criteria and restrict themselves to the exclusive treatment of adjectives and adverbs as categories. Generative grammar, on the other hand, proposes a relative definition of "categories" through the introduction of the X-bar theory where four lexical categories are presented as a set of limited features and the

phrase structure rule is schematized, respectively, as follows:

(1) N: $\begin{bmatrix} +N \\ -V \end{bmatrix}$ V: $\begin{bmatrix} -N \\ +V \end{bmatrix}$

A: $\begin{bmatrix} +N \\ +V \end{bmatrix}$ P: $\begin{bmatrix} -N \\ -V \end{bmatrix}$

(2) i. $S \rightarrow \overline{\overline{N}}\,\overline{\overline{V}}$
ii. $\overline{\overline{X}} \rightarrow [\text{Spec}, \overline{X}]\ \overline{X}$
iii. $\overline{X} \rightarrow X \ldots$

The surpassing merits in the X-bar theory, especially with regard to modifiers, are that they are simply subdivided into "specifiers" and "complements" on the syntactic condition that the former occur before $\overline{X}$ (*e.g.* $\overline{N}$, $\overline{V}$, $\overline{A}$) and the latter after $\overline{X}$ (*e.g.* $\overline{N}$, $\overline{V}$, $\overline{A}$) and that specifiers and complements cover a wider range of modifiers such as "determiners," "subjects," "objects," "auxiliaries," "tense," "complements (in a narrow sense)," and "adverbs (including sentence-modifying adverbs)."

Even accepting the syntactic validity of this approach, it seems necessary to introduce a functional approach to gain an exact picture of how modifiers work. Though modifiers are syntactically regarded as "fringes," they function as "necessary" or "non-omissible" elements; in other words, both specifiers and complements are "new" in the information structure.

This viewpoint appears contradictory to Yamauchi (1988), which argues in favor of the syntaco-informational approach of English adjectives and maintains that the position before the head (N) should be marked as "old-information" and the position after the head (N) as "new-information." The source of the possible problems arises from the view that the information structure should be represented in

dichotomy.

Given the defects of the syntaco-informational approach, the author proposes a cogni-informational approach since human cognitive abilities lie precisely on a continuum, not in a dichotomy, of categorization. This approach assumes that information should emerge as entities on the information continuum, which ranges from "absolutely old" to "absolutely new." This suggests that specifiers, which are analyzed as "old" from a syntactic viewpoint, are more or less "new" in that they are entitled as not "absolutely old."

In conclusion, the most inclusive generalization of modifiers can be obtained when they are syntactically represented as "specifiers" and "complements" in regard to their positional relation to the head and when they are informationally listed as "new" on the relative "new-information" structure.